

— 衝撃、…その後の対策 —

## 災害から身を守る 備え

まず「**自助意識**を持つて」  
人命救助は一刻を争うものであり、瞬時に起こる大災害から身を守るためには、

一言に「災害」といっても、その種別や程度で被害状況も変わってきます。今回の大地震により、町では防災の拠点となる役場庁舎が被災。電源の喪失や通信網の混乱など、災害対策本部の活動に影響がでました。また、発災が夜間だったため被害状況の細かい把握が難しく、主に住民からの情報をもとに警察、消防、自衛隊が中心となって現場での救助および周辺の捜索に当たりました。

大災害時には、行政や関係機関が被災したり、また、広域的になれば救助隊などの手が回らないといった状況も考えられます。さらには、救助活動には倒壊家屋や道路損壊による交通遮断、それに伴う時間的な限界などの問題も生じる場合があります。

まずは自分の身は自分が助けるといふ「**自助**」意識を持つことが重要です。

**注目される「共助」**

災害時において注目されるようになったのが、地域の身近な人たちで助け合う「共助」です。阪神・淡路大震災では、実際に倒壊した建物から救出された人の大多数が家族や近所の住民らによるものという調査結果が報告されています。

今回の地震でも、町内では地元消防団や住民によって多数の人たちが救助されています。また、ご近所の声掛けによって安全なところに集団避難して過ごすといった場面も随所で見られています。

一連の地震が終息した気配は見受けられません。また、「身を守る」ということは、地震に限ったことでもありません。今一度、家族や地域コミュニティによるつながりの大切さを見つめ直すのも大切なことではないでしょうか。



①木山交差点で交通整理を行い渋滞を緩和する福岡県警の職員 ②避難者の相談に丁寧に耳を傾ける日本赤十字社の職員 ③食料を求める人たちに、炊き出しのおにぎりを配布する自衛隊員 ④生活支援の相談を受ける自治体派遣職員 ⑤被災者を訪問し聞き取りを行う自治体派遣保健師 ⑥支援活動の打ち合わせをする医療チーム



益城町総務課防災係  
いわもと たけつぐ  
岩本 武継係長

発災から半年が過ぎようとしています。現在もまだ余震が続いている状況です。最大震度「7」を2度経験された皆さまは、あの時の恐怖を思い出されるかもしれません。併せて避難所での生活や車中泊での生活を思い浮かべる方もいらっしゃると思います。その時の、「不便だったこと」、「不自由だったこと」が、今後、災害に対する備えとなります。

災害から身を守るために必要な手段として保存食や飲料水など物質的なものを想像されるかもしれませんが、たしかに物質的要素も必要ですが、「災害は突然襲うもの」「必ずどこかで起きるもの」という認識が重要です。

この災害を機に、家族や職場で「災害が起きた時の行動」、「備えておくもの」などを再確認してください。最善の「身を守る備え」が見つかると思います。

また、町内には倒壊家屋や地盤沈下による危険箇所が多数みられます。通行にあたっては充分注意してください。